

農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

田んぼ 1 反に 8 俵のお米と 500 匹の赤とんぼを生産しています

受賞者 くまわり会

ふくおかけんみや こぐん
(福岡県京都郡みやこ町)

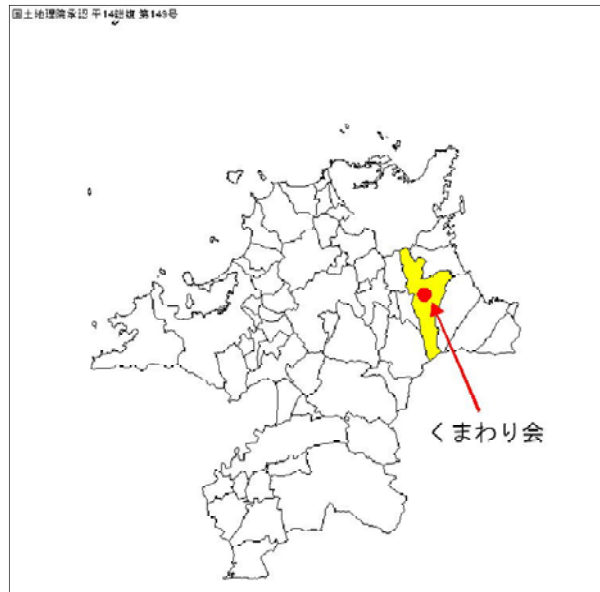
■ 地域の沿革と概要

京都郡みやこ町は、福岡県東部に位置し、町の南端は大分県に接する。周防灘から10kmほど内陸部にある中山間地域である。

平成18年に京都郡の勝山町、犀川町、豊津町の3町が合併して誕生。

旧犀川町は、南高北低で急峻な山に囲まれ、特定農山村に指定された中山間地域で、国定公園英彦山を源にする今川、祓川が町内を貫流し、周防灘へ注いでいる。

第 1 図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

大熊地区は、旧犀川町のほぼ中央に位置する農村地域である。今川の支川である喜多良川が流れ、南北と東西に延びる県道が地域内で交差している。

現在、農地は72haで、主に水稻や白ネギ、キャベツ、タマネギなどの野菜が栽培されている。

毎年5月には生立神社神幸祭に伝統の曳き山があるなど、多くの伝統行事が今も引き継がれている。

本地域も住民減少や農地の荒廃がみられ、限界集落への変貌に早くから危機感を持ち、次世代が残って生活できる、元気なむらにしたいという意識はあったが、具体的な活動はなかった。

第 1 表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	集落
地区の性格	地縁的集団
農 家 率 (内訳)	14.8%
	総世帯数 81戸
	総農家数 12戸
専兼別農家数 (内訳)	専業農家 3戸
	1種兼業農家 0戸
	2種兼業農家 9戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 210ha
	耕地面積 72ha
	田 66ha
	畑 5ha
	耕地率 34.3%
	農家一戸当たり耕地面積 6.0ha

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

住民減少や農地の荒廃がみられる中、「誰かが農業を続けないと、農業はおろか、地域そのものがなくなってしまう」という声が若手農家を中心に起こり、地域の存続に向けた取組が始まった。

効率的な農業の実現による担い手の育成を図るため、平成7年に始まった基盤整備を契機に、地域農業の存続について若手農家を中心に話し合いが行われ、40歳代の農家12名が任意組織「大熊営農組合」を発足させた。

大熊営農組合が設立し、農業生産を維持する体制はできたが、地域住民が減少し活気が失われていくという課題はそのまま残った。そこで、まず地域を元気にするため、都市住民を地域へ呼び込み、農業、農村、そして農産物を知ってもらおう活動を始めることとなった。

平成11年に地域と都市の交流が活発に行われるよう、大熊地域住民で「くまわり会」を発足させた。

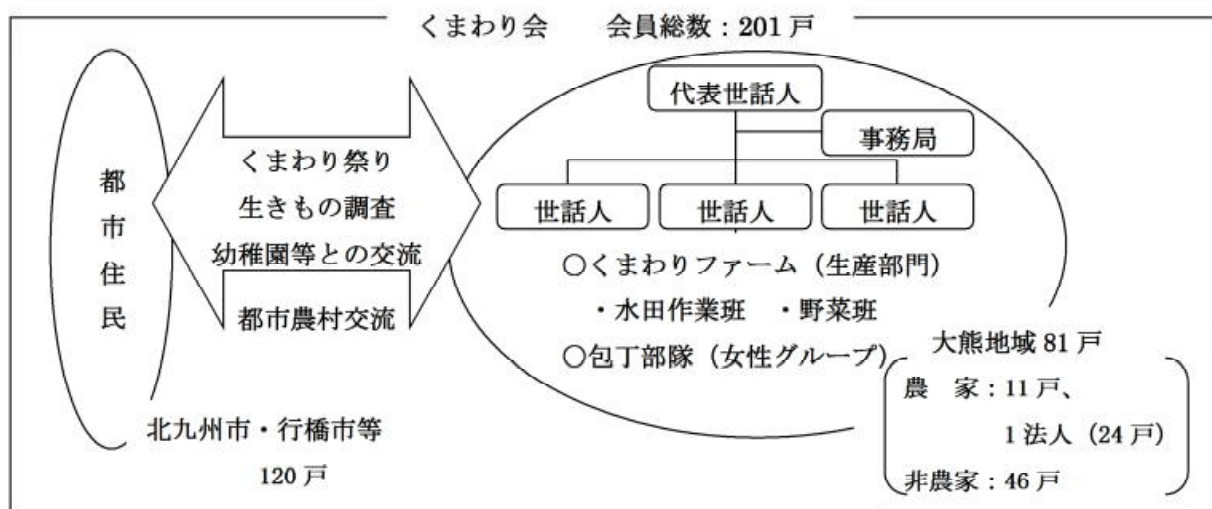
(2) むらづくりの推進体制

くまわり会を運営する世話人は、行政区の役員、世代別に選出された者、その他有志で組織し、世話人の互選で代表世話人と事務局を選任している。

また、都市等地域外から「くまわり祭り」への参加者も「くまわり会」の会員とし、都市と農村の相互交流がより図れる組織とした。

この会の中には、農業生産を担う「くまわりファーム」、くまわり祭り等で地元食材を使った料理を提供する「包丁部隊」を置いている。

第2図 むらづくり推進体制図



ア 農事組合法人くまわりファーム

平成7年に、米・大豆の作業受託を経営の中心とした「大熊営農組合」を発足させたが、その後、地域内農業者の高齢化により、「田んぼを預かってほしい」という声が年々増加してきた。

このため、平成19年に農地を借り受けることができるよう地域の農家24戸が構成員となり農事組合法人「くまわりファーム」を設立した。現在では、水田作物だけでなく、園芸品目の生産も行っている。

イ 包丁部隊

20年前に地域の婦人部が解散してから、女性が世代を超えて交流する場がなかったため、女性の活躍と交流を目的として有志が中心となり女性の会を発足した。当初、くまわり祭りでの調理を担当したことから「包丁部隊」と名付けられ、地域料理の味や村の伝統を伝えている。

■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

農事組合法人を設立し、大型機械の導入や農地集積、農作業受託の拡大を図ったことで省力・低コストな農業生産となっている。さらに、減農薬・減化学肥料栽培や耕畜連携により環境保全型農業を実践している。

また、環境保全型農業やビオトープの整備により、多様な生きものの生息環境が保全されている。

こうして美しい農村景観や生物多様性が保全されたことが、都市住民との交流で高く評価されるとともに、地域住民にもこの農村景観を守ることの必要性が認識され、「田んぼ1反に8俵のお米と500匹の赤トンボを生産しています」というキャッチフレーズのもと活動を続けている。

2. 農業生産面における特徴

(1) 水田農業の省力・低コスト生産管理体制の実現

平成7年に設立した大熊営農組合が、大型機械での共同作業等を進め、地域の水田農業の低コスト化を実現した。その後、経営を引き継いだ農事組合法人くまわりファームでは、農地集積を進め、平成27年度には、地域作付面積39.7haの約6割である22.8haを集積し、地域全体の担い手となっている。水田活用では、排水の悪い粘土土壌で大豆収量が少ないため、飼料用稲に取組み、水田の品目を水稻一本に絞ったことから、作業効率の向上や低コスト生産体制を実現した。

(2) 環境保全型農業の実施

平成16年より水稻種子の温湯消毒やレンゲの鋤き込みにより化学農薬、化学肥料を半減させる取組を開始し、福岡県の減農薬・減化学肥料栽培認証を受けた面積が、平成27年には12haまで拡大した。認証を受けたことで、消費者や小売店などに販売する米の付加価値がより明確となり、地域内で生産される米の約2割が、通常より1俵あたり5,000円も高い価格で地域内外の消費者に直接販売されるようになった。

また、平成17年から近隣の酪農家と連携して、くまわりファームが6haの飼料用稲を栽培し、酪農家との堆肥交換を行ったことで、土づくりが進み、園芸品目の生産拡大につながっている。



写真1 付加価値の高いお米生産

(3) くまわり祭りがきっかけで園芸品目が定着

平成20年から、くまわり祭りに訪れる都市住民のお土産用として、白ネギを栽培したことがきっかけとなり、地域で本格的に園芸品目の栽培を始めた。今では、キャベツや白菜、ブロッコリーなど多くの園芸品目が地域に定着し、90aの作付面積となっている。この園芸品目の導入により、栽培作業や出荷作業で女性や高齢者の活躍の場ができた。

さらに、くまわり祭りで野菜等が話題となったことで、スーパーとの直接取引や学校給食での利用など販売経路の拡大につながっている。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) くまわり祭りによる交流人口の増加

くまわり祭りを継続するうちに、「農作業やむらの人達との交流が楽しい」と評判になり、参加者数は平成11年の15人から、最近では100人前後で定着している。

この中には、毎回欠かさず参加する家族も多く、地域に密接に関わる都市住民が増加していった。

地域住民からも「自分たちや地域が外部の人達に認められるのが嬉しい」との声が聞かれ、都市住民との交流の重要性が再認識されるとともに、地域に対して自信と誇りを持てるようになった。



写真2 都市住民による田植体験

(2) 「包丁部隊」の活躍

地域で採れた農産物や山菜でこしらえた料理は、懐かしいふるさとの味として祭りに参加した都市住民に高く評価され、それを目当てに参加する者もいるなど、都市住民との交流の取組の持続性に大きく寄与している。

「包丁部隊」には、結婚を機に地域外からきた女性が多く、彼女達の人脈は都市住民の会員募集や米の直接販売の拡大にも大きく貢献している。

(3) 都市住民と見つけた「大熊らしさ」

ア 生きもの調査と大熊の豊かな自然

減農薬・減化学肥料栽培や耕畜連携の取組を進めるなかで、農業を取り巻く「環境」に、会員の意識が向いていった。そこで、平成17年度から農業で営まれる自然環境の指標として、都市住民と一緒に地域で「生きもの調査」に取り組んだ。

生きもの調査では、トノサマガエル、タイコウチ、ミズカマキリなど他の農村では絶滅・減少している生きものが大熊地域には多数生息していることが分かった。また、秋の風物詩ともいえるウスバキトンボ（通称：赤トンボ）が地域の水田には10aあたり500匹も生息しており、農業と農村が日本の風景を作っているのだということを参加者に認識させた。この多様な生きものを守る取組こそが「大熊らしさ」であると気づき、生きもの調査をくまわり祭りのイベントの大きな柱として組み込んだことで、地域の特徴ある活動に成長した。

イ ビオトープの建設による希少生物の保護

ほ場整備とともに消滅してしまった生きものすみか（ビオトープ）を復活させようと整備を進め、現在、大小5つで合計約40aのビオトープが設置され、多くの生きものすみかとなっている。このようなビオトープの整備や環境にやさしい農業の実践により、平成28年にはコウノトリの飛来が確認できるなど、これまでの生きもの多様性確保を継続してきたことが、大きな形となろうとしている。

ウ 幼稚園児との交流

平成21年、生きもの調査の話を知った隣の幼稚園から、園児達の情操教育や食育として生きもの調査や農作業体験の依頼があった。くまわり会は、生きもの調査やシイタケ狩りなどを企画し、園児と家族を招待した。これがきっかけとなり、園児の家族の地域に対する親しみが深まり、くまわり祭りの参加者や地域農産物購入のリピーターの増加へ



写真3 幼稚園児との交流

とつながった。さらに、幼稚園からの提案により、幼稚園に出向いて農産物バザーや地域の紹介を行い、親密な相互交流となっている。

エ 地域住民の意識変化

生きもの調査に参加した都市住民は、初めて目にするビオトープや生きもの調査などに感激し、地域の自然や農業に真摯に取り組んでいる農村の人達に心を動かされていった。

また、当初はビオトープの整備に懐疑的だった地域住民も、生きもの調査で生息が確認されたニホンアカガエルを「俺たちのカエル」と呼び始めるなど、地域全体が自然と農、そこに生息する生きもの達への「まなざし」とビオトープの必要性を共有していった。

(4) 美しい農村景観の創造

都市住民との交流の中から、地域の素敵な農村風景を後生に残すことの必要性が醸成された。ビオトープの整備や植樹、草刈りや竹の伐採等の景観づくりをすすめる、春夏秋冬の草花や木があふれ、鳥や虫などの生きものが豊かに暮らす環境を守り、四季が感じられる地域を創造することができた。



写真4 ビオトープ整備

(5) 地域農業の伝統文化をつなぐ世代間交流会

都市との交流を深めるなかで、地域の若い世代も祭りに積極的に参加するようになり、年に1度、くまわり会主催で地域の農業者と子供達が世代間で交流する「たすきの会」を開催している。後継者と現役の農家が集い、飲食を交えながら意見交換を行うことで、地域の共同作業や生立神社神幸祭等の伝統行事の円滑な継承を図っている。若者からは、「自分の住む地域の農業のことがよく分かった」、「大熊のことは、自分たち世代が引き受けた」等、頼もしい声が上がっている。



写真5 伝統文化の継承
(生立神社の神幸祭)